

雨水貯留タンクを通じて 水とのかかわり方を見直す

現在の事業の概要とこれまでの活動の流れを教えてください。

村上——NPO法人碧いびわ湖は、2009年夏に滋賀県環境生活協同組合(環境生協)から事業を引き継ぎ、設立された事業体です。

もともと環境生協では、三つの事業を柱にしていました。一つは、廃食用油を集めリサイクルしてせっけんにしたり、牛乳パックを回収しリサイクル製品にして共同購入したりするリサイクル事業です。二つめは、合併浄化槽の設置です。せっけん運動は1970年代から始めていました。家庭から廃食用油を流さないようにしても、当時は単独浄化槽しかありませんでしたから、ほとんどの生活雑排水が垂れ流しになっていました。そのことに気づき、「水の自主管理」を掲げて合併浄化槽の設置を進める運動を始めました。そして、三つめがグリーン購入です。「買い物が世界を変える」を掲げ、環境に配慮した商品の共同購入を始めました。1990年代後半からは、廃食用油のリサイクルだけでなく、食用油自体も自分たちでつくろうと、エネルギーと食の地域循環を目指す「菜の花プロジェクト」もスタートさせました。

しかし、こうした事業・活動を進めるにあたり、生協という法人の制約が目立ってきました。



村上 悟 さん

MURAKAMI Satoru

に伺いました

30余年の歴史を持つせっけん運動等の「環境生協」の活動を継承し、琵琶湖の未来に向けて取り組む村上悟さんにお話を伺った。

むらかみ・さとる さん
プロフィール

1976年滋賀県余呉町(現長浜市)生まれ。2007年から滋賀県環境生活協同組合理事。2009年より特定非営利活動法人碧いびわ湖代表理事。組織の名称である「碧いびわ湖」は、「碧い琵琶湖を子どもの未来へ」という30年来の願いを受け継ぐものである。

たとえば、行政や企業、非組合員に対する事業供給ができないことがその一つです。そこで設立したのが、NPO法人碧いびわ湖です。

社会的に意義があることで、かつ事業として成立することは何かを考え、従来からの合併浄化槽に加えて、最近では雨水貯留タンクや太陽熱温水器の設置など、自給型のエコロジカルな「住まい」を実現する事業に力を注いでいます。特に今一番力を入れているのが雨水貯留タンクの設置です。雨水はこの屋根にも降りますし、雨水タンクは少額で設置できます。水道水と違い雨水は超軟水ですからせっけんとの相性もいいのです。

雨水をためて使い出すことは、自分と水とのかわり方を見直すきっかけになります。遠い水源から引かれた水道に頼り切るのではなく、井戸水、雨水など身近な水源を活かし、それぞれの水の特徴を感じながら暮らすことで、僕らが本来持っている感性を呼び覚ますことになりました。また、地域で身近な水源を自分たちでつくることで、コミュニティ意識を高めることもできます。

あなたは、琵琶湖をどう描きますか？

——これからのような活動を展開されようとしているのでしょつか。どのような思いを地域の人たちに伝えていこうとしているのでしょつか。

村上——琵琶湖は、滋賀の社会を映す鏡です。自分たちの生活の結果がすべて現れてくる場所

です。琵琶湖が昔のように透き通った水になり、生き物がいっぱいいる場所になることは、きっと誰もが願っていると思います。しかし、最近では琵琶湖と僕らの距離は遠くなり、記号化しているように感じます。たとえば先日、子どもたちが描いた琵琶湖のポスターを観る機会があったのですが、その多くには地図で見えるような琵琶湖の輪郭が描かれていました。琵琶湖で泳いだり遊んだりしている子どもたち、琵琶湖の輪郭ではなく、魚や友だちとのリアルな体験を描くのではないでしょつか。

どんな琵琶湖を目指すのかという話の前に、自分のすぐ身近にある水や土や森とのつながりを見つめ直すことが大切だと思います。滋賀県民みんなが自立的、循環的な生活を実現し、身近な地域に根差して暮らせるようになれば、その結果として、琵琶湖は健全な姿を取り戻していくと思います。

環境生協以来、僕らがテーマとしているのは、環境問題の原因となっている一人ひとりの暮らしをどう変えるかということなんです。エネルギー、水、食料、ごみ、排水など、家庭でのインプットとアウトプットを一つ一つなぎ直す中から、これからの暮らしと社会を構想していきたいと考えています。

自然や人との非言語的なコミュニケーションに期待

——これからの土木技術者は、何を考えていくことが求められているのでしょつか。

村上——このごろ、大切だと思うのが非言語的な（身体を使った）コミュニケーションです。人対人のコミュニケーションもそうですが、まず、自然現象そのものや素材とのコミュニケーションが大事だと思っています。そう思うのは、以前、大工の見習いをしてきた経験からです。木は、一本一本、強度も、重さも、表情も違います。設計をする立場からすれば、それは「ばらつき」というマイナス要素かもしれませんが、どこにどの木を使えばよいか、一つ一つ見極めていねいに作業を進めていくと、均質な素材ではつくれない、強度と美しさを持った建物が出来上がります。それを可能にするのは、一本ずつ目で見て、手で触れ、持ち上げて見極める、という、木との対話、すなわち身体を使ったコミュニケーションなのです。

また、身体を使ったコミュニケーションは、人対人においても大切だと思います。立場が違っても互いに理解ができない、ということの原因の一つには、体験が共有できていないことがあるのではないでしょつか。農作業や川掃除を通じて農村のコミュニティが出来上がってきたように、現場の中で共同作業をすることは、行政、事業者、市民という垣根を超える可能性を秘めていると思います。

そうしたコミュニケーションを通じて身に付けた感覚や技術を、ものづくりを通じて人びとに提示できるのが、みなさんのお仕事の醍醐味だと思います。人びとのみずみずしい感性を呼び覚まし、人と地域との絆を深めるような土木を、一つ二つ形にしていっていただきたいと思っています。